

# すてきな切り紙おばあさん。高鳳蓮

周路 著 李晴 訳

## 第1回 初めて高鳳蓮さんに出会う



中国陕北、黄土高原のど真ん中に位置する延川県は、標高1000mほどの山並みが続き、そこに深い谷や溝が縦横に走り、また北から南へと、流域の黄土を巻き込んだ黄色い大河が流れます。黄河です。

1991年1月(旧暦1990年臘月)、私はリュックを背に陕北への旅に踏み出し、途中、山東省と山西省の木版年画と民間剪纸の産地を経て、臘月27日に山西省の臨汾からバスで黄河を渡り、やっと陕西省の白水県にたどり着きました。年末のため、国営長距離バスは運休し、私営長距離バスに乗って洛川に向かいました。バスには正月を家で迎えるために戻ってきた客が数人だけ。皆、帰心矢の如しだったのででしょう。町はずれでさらに乗客を乗せるために停車したとき、小用を足そうとバスを降りた私を見知らぬ荒野に唯一人残したまま、一瞬のうちにバスは発車してしまいました。衣服、カメラ、途中で収集した剪纸と民間年画などの荷物はすべてバスの中です。頭の中が真っ白になりました。

翌日、呆然としたまま手ぶらで洛川へたどり着きました。洛川には誰も知り合いはいませんでした。県文化館の幹部・李楽見を訪ね不運な出来事を話すと、李楽見は黙って私を家に連れて帰り、食事をさせてくれ、泊めてくれ

る一方、私のリュックの行方についてもあちこちと尋ねてくれました。「地獄で仏」とはまさに李楽見のことでした。ありがたいことにリュックは見つかり、中の荷物も全て無事でした。しかし、この災難のせいで私は精力をすっかり失ってしまい、何をやる気分にもなれませんでした。

正月の延安はとても賑やかで、街には人が溢れていました。私は市文聯の友人の協力で市の東にある、橋児溝に残っている古い窯洞を訪ねました。ここはかつて魯迅芸術学院があり、父が若い頃に学んだところです。建国後、この地を再び訪れたいと願いながら果たせなかった父の墓に供えようと一掴みの土を集め、順調とは言えない陕北の旅にやっとけじめをつけることが出来ました。

そのとき、私に付き合ってくれていた友人が「黄河近くの延川県に、高鳳蓮というおばさんがいる。彼女の剪纸はとてもユニークで、斬新なものだ。」と、聞かせてくれました。

以前、私は延川県へ二度訪れたことがありました。ここでは、美術館幹部の冯山运(féng shān yùn)の指導で素晴らしい民間布堆画(アップリケ)の創作作品が作られており、1987年、私が合肥美術館で開催したこの民間布堆画の展覧会と画冊の出版は、美術界に大きな反響を呼びました。

当時私は「陕北剪纸集」という本を編集していましたので、すぐに冯山运の案内で延川に向かいました。延川からは県委に勤めている高鳳蓮さんの長男の白江录(bái jiāng lù)の運転で、奥深いところにある白定源村にようやく辿りつき、あまり外へ出ることが好きではないという質朴な高鳳蓮さんに、初めて会うことが出来ました。

これまで随分たくさんのお剪纸作品を見てきましたが、高鳳蓮さんの剪纸作品のように伝統的な図柄を打ち破り、奇怪な造形と魅力的な自由奔放な表現力は見たことがありません。すっかりその作品に目を奪われ、直ちに編集集中の「陕北剪纸集」の中に加えることにしました。

出来るだけ多種多様な模様を取り揃えて作品を選ぶことにしました。そして、お金を払う段になったときのことです。私は殆ど無一文だということに気づき、恥ずかしさで一杯になりました。その時、高鳳蓮さんが示してくれた好意は、忘れられない思い出です。彼女は私が途中で災難に会ったことを知り、また、私がこの地にやって来たこと



の意義を理解してくれ、お金を取らなかったばかりか、さらにたくさんの剪紙をくれたのです。この旅では不測の事態もおきましたが、大きな収穫のある旅となりました。

家に戻ると早速「陝北剪紙集」の編集にとりかかり、いろいろな角度から検討をした結果、4人のお婆さんの作品に絞り、題名を『陝北四婆姨剪紙』としました。4人のお婆さんはこれまで名前を知られた存在ではありませんでしたが、それぞれの作品は独特の風格があり、この地域を代表する作品と言えるものでした。お婆さんたちは、洛川県の楊梅英、韓菊香、延安十里舖の姫蘭英、延川県の高鳳蓮の4人です。後に、私の父と魯迅芸術学院で同学だった有名な版画家の古元先生\*に本の題名を書いていただくよう依頼の手紙を送りました。

\*古元：解放区の創作木版の傑出した代表的版画家

1992年6月、編集した作品を安徽美術出版社に提出をして、私は日本へ版画の勉強のために旅立ちました。2年後に帰国をするまでの間、私は出版社との連絡は絶やしませんでしたが、本の出版は出版社側の事情で一向に進んでいませんでした。

4人のお婆さんたちとの約束を実現させたい、そして特に高鳳蓮さんの厚情に報いたいと、私はついに出版社の求めに応じて4000元を支払うことにし、ようやく印刷機を動かすことになりました。そして、やっと高鳳蓮さんたち4人のお婆さんの作品が初めて印刷物となり、全国に紹介されることになりました。やがてこの本は世間の反響を呼び、出版社は再版をし、この本の出版の意義が改めて証明されたのです。

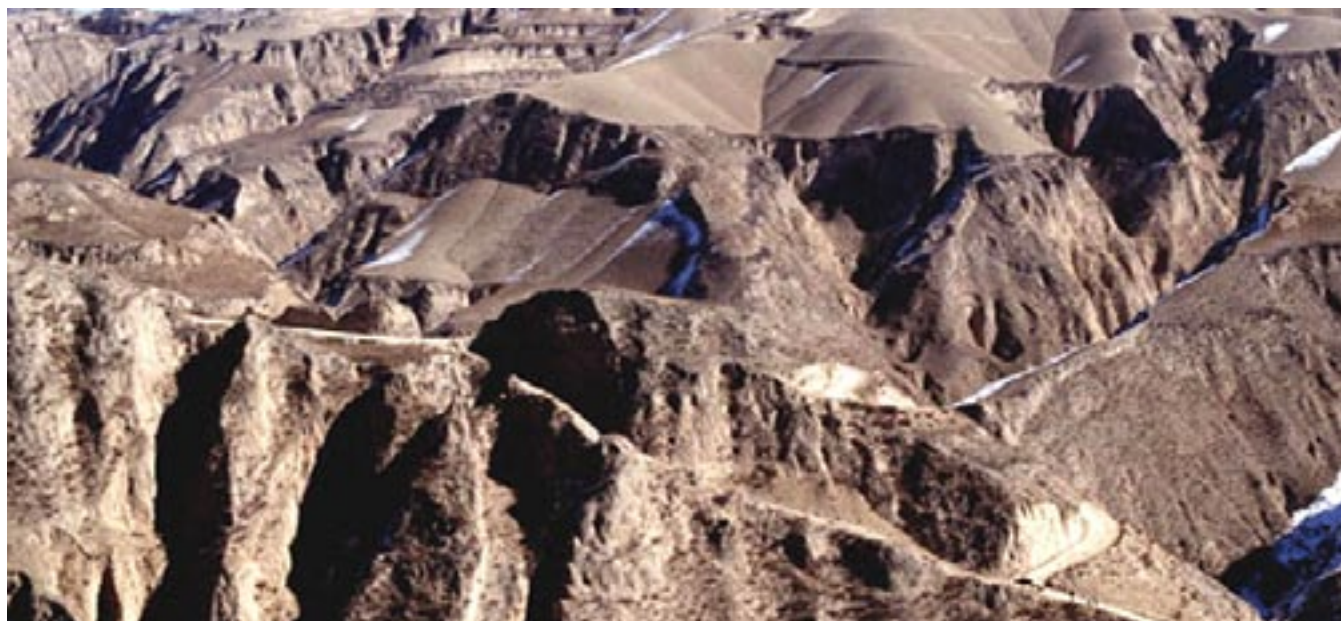
1996年正月(旧暦)、私は、出版をされた本をもって順

番に洛川の楊梅英と韓菊香、それに延安の姫蘭英さんたちを訪ねました。本を差し上げ、さらに私の持っている本に記念としてお婆さんたちの名前を書いてもらいました。最後に訪れた延川の高鳳蓮さんのお宅でも、同じように私が高鳳蓮さんにサインをしてくれるよう頼むと、高鳳蓮さんはどうしても承知をしてくれません。高鳳蓮さんが学校へ行っていたことがなくて字を知らないということは知っていました。しかし、誰かが手を添えて書いてもいいのです。楊梅英さんは何年か学校へ行っていました。字をすらすらと書くことが出来ます。韓菊香さんは何日か私塾へ通ったことがあります。昔ながらの繁体字ですが書くことが出来ます。姫蘭英さんは全く字を知りませんので、娘さんが手を添えて名前を書いてくれました。

高家のお婆さんは楽しそうに、同じようにしようと筆を持ってきて、高鳳蓮さんに教え始めました。すると喜びに浸っていた高鳳蓮さんは不機嫌になり、悩み始めました。その場にいた人たちもいささか気まずい雰囲気になってきた時、高鳳蓮さんは無造作に小さな紙くずを拾い、指先ほどの小さな鼠を剪ったのでした。高鳳蓮さんは鼠年生まれ、この小さな鼠がお婆さんのサインの代わりというわけです。この可愛い小さな鼠は本の扉の上に貼られ、他のものとは別格の存在となりました。それと同時に高鳳蓮さんの独特の性質も伺えるものとなったのです。



高鳳蓮は「ねずみ」の剪紙を剪って自分のサインにした



典型的な陝北黄土高原の風景 於：陝西省延川県 撮影：周路